

第一一二話

碓井貞光虜保輔事

『前太平記』上 卷第十七 三五〇頁から三五三頁より

[貞光、保輔を捕らう]

左馬権頭源頼光朝臣の陪臣、碓井荒太郎貞光は長年の意向で、このたび少しの間お休みを頂戴し、大和国の長谷寺^(巻)に参詣した。個人的な参拝であるのでと言って、従者はわずか三四人を連れてらっしゃって、こっそり参詣したのだった。さて、そこで右京亮保輔は久我暇で狼藉を働いた時から行方知れずとなり、伯父甥別々になって、大和国吉野山^(式)に潜んでいたが、甥の斎明が近江国の高島郡にいて、京都から追っ手が出向くと伝えられ聞き、急いで彼の地に行って斎明に加わって、仮に雌雄が決するならば、同じ所で死にたいと、五月上旬に山を出て、伊賀街道^(参)を経て、高島郡を越えようと思って、笠を被り、太刀を背負い、こっそりと急いでいた。古河野辺^(肆)を過ぎる時、貞光の帰り道に間が悪く行き会った。昔から互いに面識があることはないので、何の考えもなく通り過ぎると、保輔は再びいつも

何と無く打ち過ぐるに

の病(盗人としての性)がぶり返し、「ああ、素晴らしい馬だなあ。この馬に乗るならば、明朝には高島へきつと易々と行き着くだろう。ああ奪いたい」と思い、深く

しや取らばや

傾けている笠を取り去って投げ捨て、貞光の乗っている馬の尾の付け根をはっしと握り、「もしもしあなた、降りてください。少しお願い申し上げるべきことがある」。貞光は横目で見て、みっともない男の振る舞いだなあと、聞かない素振り

貞光尻目に見て、

醜れたる男が挙動や

通り過ぎたが、「まあ降りてください降りてください」とひっきりなしに言ったので、貞光は振り返り、「他人のことかと思っただが、さては私に用があるのだろう

「余所の事ぞと思ひしが、

さては某に用ありや。

か。降りるまでもない。そこから申されよ。耳を傾けるに足りるならば聞こう

下るゝまでもなし。

其より申されよ。

聞く事あらば聞くべきぞ」

か」。「いやまあ降りてください。（馬によって）仕切っているには申し上げられな

隔てゝは申されぬ事ぞ。

いことだ。不躰に申し上げているために、承知なさらぬのももちろんである。少

馴れ馴れしく申すとて、

意得給はぬも理なり。

しの間降りてください。頼みたいことがある」と一途に言ったところ、貞光は分か

須臾の間ぞ下り給へ。

憑みたき事あり」

らない者だなあと思ったが、ともかくも事情を聞きたいと思って馬から飛び降り、

「何事ですか」と尋ねると、保輔は「いや、降りてくださったので、もはやお前に

「何事ぞう（「候」と解釈）」

は用もない。言うべきこともございません。とは言うものの、この馬には用があるよ」と、言い終えもせず飛び乗って、鐙に足をかけて駆け出すのだが、貞光はすかさず保輔の太刀の帯取りをはっしと掴んで、保輔も馬も動かさず、「天下の武将左馬権頭殿の家来で、四天王と数えられた日本一の勇士、碓井荒太郎貞光という者に下馬をさせた不届き者。どこへ行こうと鞭を掲げるぞ」と引きおろそうとするところを、保輔は（勝負を）引き受けたと取っ組みあった。もともと碓井は力が強く、

保輔意得たりと

保輔を取り押さえ、太刀に手をかけようとしたが、「いやいやこのような世にもま

「いやいや斯かる希代の癖者、

れな怪しい者は、都に引き連れて人に見せよう」と思って、二の腕、肘と手首の間

都へ具して人に見すべし」とて、

高手小手を搦め、

をとらえて縛り、そして馬に抱えて乗せ、鞍の居木_(伍)に縛りつけ、「先ほど馬を求

「以前に馬を乞ひしに、

めたが、その願いを叶えないことも本来の意思ではないので、お前の望みに従うの

其所望叶へざらんも本意ならねば、

汝が望みに任するなり。

である。しかしながら、行くべき場所は私の行きたい場所であるので、都に連れて

但し、

行くべき方は我が望みなれば、

都に具するぞ」

と、

行くぞ」と、召使に差し縄を引かせ、後ろから鞭を打って追いたて、都へ帰ったの

中間に諸口取らせ、

跡より鞭をくれて追つ立て、

都に帰りけり

だった。

【保輔獄に繋がる】

すぐに左馬権頭殿（頼光）の御前に出たところ、「おお貞光、帰ってきたのか。めったにない私用での外出、珍しく思ったが、和州に出向くと言った様子で、あそ

適々の私歩行、

珍しく思ひしが、

こは古都であり名所も多く、歌の中に詠みこまれた旧跡であるので、きっと細かく

委しく

見て参るには、まだ（帰るのは）今日明日の折ではないだろうと思ったが、優美な

見て参りなんずるには、

未だ今明の程にては有るまじく思ひしに、

艶しき

眺めもなかったために、早々と帰ったのだろうか」とお笑いになったので、貞光は

眺めもなかりしか、

早く帰りつる事よ」

承って、「そのことでございます。お聞き知り申し上げるよりも見所が多く、立ち

去りにくいと思われましたが、古河野辺とか申し上げる所を通りました時、予想外

の珍品を買い入れてございますので、一瞬でも早くお目にかかり申し上げようと存

片時も早く見参に入れ進らせんと存じ、

じ、その他の所は一切見ることもせず帰り参ってございます」と申し上げる、左馬

自余の所は一見にも及ばず帰り参じて候」

権頭殿は、「おや、（あの）荒々しい貞光の土産かあ。そらそら（見せてみろ）」

「あな厳めしの貞光が家裏や。 其々」

と仰るので、「お引き受け申し上げた」と言って立ち上がった。四天王を始め、近臣の面々もどのような珍品があるのだろうかと思いを待っていたところに、大男で、

大の男の

縛られているものを、馬に乗せながら庭に引っ張り出す。権頭殿は一目御覧にな

揃めたるを、 馬に乗せながら庭上に引き出だす。

り、手を打って（→拍手か？）、「これは右京亮保輔である。貞光は面識があるはずないが、如何にして捕えられたか」とお尋ねになったので、「こうこうのことで

「云々の事にて

狼藉を働いたもので、その腹いせに都の近くまでお連れ致し（→引き回し）、苦し

狼藉を仕りたる程に、 其腹いせに都近くまで召し具し、

い目にあわせ、その道で追放しましょうと思ひ、このようにいたして上ってきまし

苦しき目を見せ、 道にて追ひ失ひ候はんと存じ、

たが、貞光は誰ともその顔に見覚えがございませんので、どうてい主君（→貴方

中々上の

様）への御目通りまではと思ひつかないでいましたが、貞光のお連れしていた下男

御見参とまでは存じ寄らず候ひしに、

は都の者で、保輔を詳しく見知っていて、道中で申しあげましたことには、『この者は往来する人を脅かせた強盗の頭、右京亮と申しあげる者である』と申しあげた具合で、色々騙し誘って聞き白状させますが、はなから彼はその名を恥じて、結局名乗らない。身分の低い者の申しあげることであるので、軽はずみなことを申しあげているのだろうかと思ったが、千に一つも彼が仮に右京亮であるならば、貞光が直々に討手の御使いは受けられないが、世のため人のためでございますので、救う

貞光直に討手の御使いは蒙らね共、

のがよい者ではないと、人に見せてみますと、『疑いもなく保輔である』と申しあげることによって、偶然の参詣で良い儲け(を得た)とお連れしてございます」と

適々の物詣で、能き儲けと召し具して候」

申しあげた。権頭は頷きなさり、「感心感心、よくいたした」と言って、すぐに検

「神妙神妙、能く仕りたり」

非違使の役所に渡された。審議に疑いなかったので、すぐに牢屋に入れられた。前

実検紛れなかりければ、

世の報いとはいうものの、仕方がない腕のたつ人に縛り捕えられ、獄に入ることの

前世の宿報とは云ひながら、

詮無き腕達に搦め捕られ、

縲紲の

恥じを多くの人目に曝し、牢獄の苦しみを一身に受ける。そして、貞光は予期せ

辱めを万人に曝し、

牢獄の苦しみを一身に受く。

ずに手柄を立てて、自身の評判を示すだけでなく、ともかくも源家の力は、さらにいっそう高く振るわれた。

注釈

※壹・大和国の長谷寺……現奈良県桜井市初瀬にある真言宗豊山派の総本山。

※貳・大和国吉野山……現奈良県吉野郡吉野町の山。桜の名所。

※参・伊賀街道……奈良から山城国、伊賀国、伊勢国を通る街道。しかしこの街道の整備は近世期に行われるようである。

※肆・古河野辺……長谷寺と長谷寺近くに流れる初瀬川の別称。

※伍・居木……馬具の鞍橋の部分の名称。鞍と前輪と後輪との間にわたす木。

久しぶりの頼光パート更新です。

今回は貞光が主役ですね！104話と合わせてみると、非常に彼が勇ましく、かつ頼光公への忠誠心の厚い人物であることが伺えます。そして、長谷寺への参詣も彼の信心深さの表れでしょうか。しかし、貞光の自分を日本一の勇士であると自称する姿は「自分で言うな」と思ってしまいますね……！頼光公も彼を「厳めし」と表現していますから、よっぽど普段の振舞いが荒々しかったり、尊大だったりしたのかと思います。藤元元の描き方は彼の出生を鑑みてキャラクターを作っているのですが、こう見てみると、平安時代から作品成立当時まで碓井貞光という人物が、どのような人柄であったと伝えられていたかが気になります。

ちなみに、高校時代に訳した話は「酒吞童子編」（127～133話）を除けばこれで最後です。この後保輔がさらに問題を起こすようですが、今からそれを訳するのがとても楽しみです。そして、保輔が捕まえられたことによって保昌は当時どう思ったか……。

あと、今度時間とやる気があったら吉野山から高島まで保輔がどう向かおうとしていたか、地図も使いながら考察したいと思います。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2016/10/2

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

